

フォートリエをめぐる——「間の世界」に立つこと

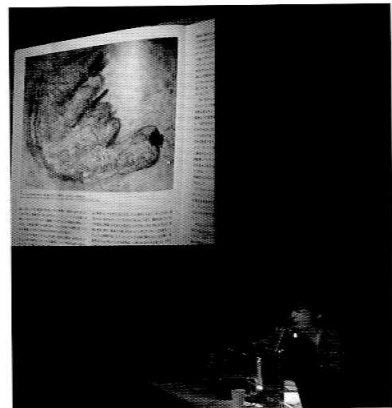
堀江 敏幸

はじめまして、堀江と申します。台風接近という悪条件のなか、たくさんの方々にお越しいただき、ありがとうございます。フォートリエをめぐる今回の連続講演会では、専門家がお二人いらっしゃるの、雨風がやや強すぎますけれど、美術の世界とは無縁の人間ですからその露払いとして、フォートリエという画家の名前とどのように出会ったか、どんな接点があったのかについてお話したいと思います。

数年前に現場から離れてしまいましたが、ぼくは学生時代からフランス文学を勉強して、ながいあいだ仏文学者という肩書きで仕事をしてまいりました。研究テーマにしていたのは、ヴァレリー・ラルポーという作家です。近年では岩波文庫から『幼なごころ』『A・O・バルナブス全集』、ちくま文庫から『恋人よ、幸せな恋人よ』といった作品が紹介されているので、ご存じの方がいらっしゃるかもしれません。ラルポーは1881年、フランスのちょうど真ん中、アリエ県のヴィシーという都市で生まれました。ヴィシー・セレスタンという、日本にも輸入されている有名なミネラルウォーターの産地です。ラルポーはまさしくこのミネラルウォーターの鉱泉開発者のひとり息子なんですね。ローマ時代から湯治場として知られていたヴィシーの鉱水は、飲むだけでなく、シャワーを浴びたりマッサージをしたり、総合的な治療に使われるのですが、ラルポーの父親はそれをボトルに詰めてフランス全土で販売し、大きな成功を収めました。富豪の跡取りということ。彼はその富を、文学で蕩尽してしまいました。

1913年、ラルポーはヨーロッパにやってきた南米の大富豪の青年を主人公とした『A・O・バルナブス全集』を発表し、高い評価を得ます。初出は『NRF』(エヌ・エル・エフ)という文芸雑誌でした。第一次世界大戦前からこの雑誌の編集に携わり、戦後は編集長になったのが、若き日の小林秀雄にも影響を与えた批評家のジャック・リヴィエールです。1925年にそのリヴィエールが40歳を目前にして亡くなり、30歳そこそこだったジャン・ポーラン(図1)がその跡を継ぎます。小説家、批評家、そして現代美術批評家にして収集家でもあったポーランは、第二次大戦後からフォートリエの芸術を理解し、つよく支持していた批評家のひとりです。「アンフォルメル」という批評用語の発信源でもあります。ぼくはまずヴァレリー・ラルポーという小さな作家の周辺を探りながら、『NRF』という雑誌の編集に興味をわき、必然的にポーランの仕事をたどることになりました。文学、言語学、美術におよぶ彼の広範な知的好奇心と人間関係のなかでフォートリエに出会ったわけです。

フォートリエとの個人的な縁は、もうひとつあります。1989年5月から9月にかけて、パリ市立近代美術館で、大規模なフォートリエ回顧展が開かれました。じつはこの年の9月末、会期終了の前日だったかにぼくは留学生としてパリに到着したんですね。事務手続きに翻弄されて、フォートリエの展覧会には、まったく気づかずにいました。悔やんでも悔やみきれない状態です。今回の回顧展は、ですからじつに四半世紀待ち望んでいた機会になるのです。



この論者は、2014年8月9日の豊田市美術館での講演原稿を元にし、大規模な修正を加えられたものである。堀江敏幸氏には、フォートリエについてのテキストはないものの、ジャン・ポーランとジャン・デュビュッフェについてのエッセイ「忘却の河」(『子午線を求めて』思潮社、2000年所収)がある。



図1 フォートリエとポーラン
撮影年不詳、撮影：André Ostier
出典：Jean Fautrier 1898-1964, exh.cat., 1989,
Musée d'art moderne de la Ville de Paris, p.221.

*



図2 ジャン・フォートリエ《管理人の肖像》1922年頃
油彩、カンヴァス 81 x 60 cm
ウージェーヌ・ルロワ美術館、トゥルコワン
出典：『ジャン・フォートリエ』展カタログ、
2014年、東京新聞、28頁、作品番号001



図3 ジャン・フォートリエ《玉葱とナイフ》1926年
油彩、カンヴァス 50 x 61 cm
ミヒャエル・ハース画廊、ベルリン
出典：『ジャン・フォートリエ』展カタログ、
2014年、東京新聞、36頁、作品番号007



図4 ジャン・フォートリエ《横向きの頭部》1926年頃
油彩、カンヴァス 35 x 27 cm
ハース画廊、チューリヒ
出典：『ジャン・フォートリエ』展カタログ、
2014年、東京新聞、62頁、作品番号031

今回の展示のカタログには、《管理人の肖像》(図2)と題された一枚があります。「ma concierge」とありますから、彼が住んでいたアパルトマンの家の管理人さんがモデルです。1922年頃の作品ですね。多少デフォルメしてあるのかどうなのか、左眼の不自由な感じと、鉢物のような皮膚の色がじつに印象的です。細かい、丁寧な仕事ですね。油彩なのに、どこかテンペラみたいな透明感もある。彼女のブラウスの、重い黒の発色がみごとです。第二次世界大戦後のフォートリエしか知らない者には、驚きをもたらす一作でしょう。基礎的な勉強を積んでいることがよくわかる描写ですね。1920年代の半ばまでは、人物にせよ静物にせよ、何が描かれているのか勞せず説明できる描き方がなされていました。

1926年に描かれた《玉葱とナイフ》(図3)は、調理台かテーブルの一部を拡大したようにも見えます。一番上の玉葱と一番下のナイフを見下ろす目の位置が微妙にずれているように感じられます。角度の異なるまなざしが混在しているのに、遠目に見るときちんとおさまっている。上の方がややいびつな球体です。異なる形のものが5点、くるとひとまわりする動きをつくりだしています。どれかひとつ、ほんのわずかでもずれると、全体のバランスが悪くなる。そういう配置です。シャルダンの絵にもそういう感触がありますけれど、ただモノがおかれているだけではなく、モノとモノが感星みたい、引力で引き合ったり反発し合ったりする。それがいきなり、「黒の時代」と呼ばれる作風に変化していく。輪郭のはっきりしない一連の裸婦像が登場する時代ですね。

おなじ年の《横向きの頭部》(図4)。同じ頃に描かれた女性像のなかでも、これはかなり茫漠としているほうですね。輪郭が背景に溶け込んで、浮かんでいるのか沈んでいこうとしているのか、よくわかりません。しかしその前年の裸婦像とはまったくべつの世界に踏み込んでいます。1927年に描かれた、《兎の皮》(図5)という作品があります。おどろおどろしい感じの絵です。兎を吊したもの。兎の皮。たしかに兎と言えば兎ですが、鳥に見えなくもない。皮を剥がれた兎と兎の距離、表情のない表情。首くりのようにも見えて、黒いものを感じさせます。一方で、どこか荘厳な雰囲気もある。1920年代の半ばに、なぜ具象から抽象への動きがこんなふうに加速していったのか。もちろん完全に切り替わるというより、まだ両者混じり合っている感じですが。

フォートリエは、1898年、パリに生まれています。両親は正式に結婚していません。彼は母方の姓を名乗っています。父親が亡くなり、祖母が亡くなったあと、フォートリエは母親とイギリスに渡り、ロンドンのロイヤルアカデミーで絵を勉強しました。基礎を学んでいるんですね。そして、1917年に帰国し、第一次世界大戦に応召します。ポーランドとおなじ戦争を見ているということですね。フォートリエは軍の補助部隊に入り、前線で毒ガスを浴びて、その後遺症に苦しんでいた。《兎の

